# 老いや死について
# 思考する場をつくる試み

## ー 写真展「ぐるり。」による地域へのアプローチ ー

尾山 直子[1)]、神野真実[2)]
1）桜新町アーバンクリニック 在宅医療部、　2）株式会社メディヴァ

# 日本在宅医療連合学会
# COI開示

尾山 直子

演題発表に関連し、
開示すべきCOI関係にある企業などはありません。

# 自己紹介

## 訪問看護師

東京・世田谷区
桜新町アーバンクリニック 在宅医療部
桜新町ナースケア・ステーションに所属

## 京都造形芸術大学を卒業

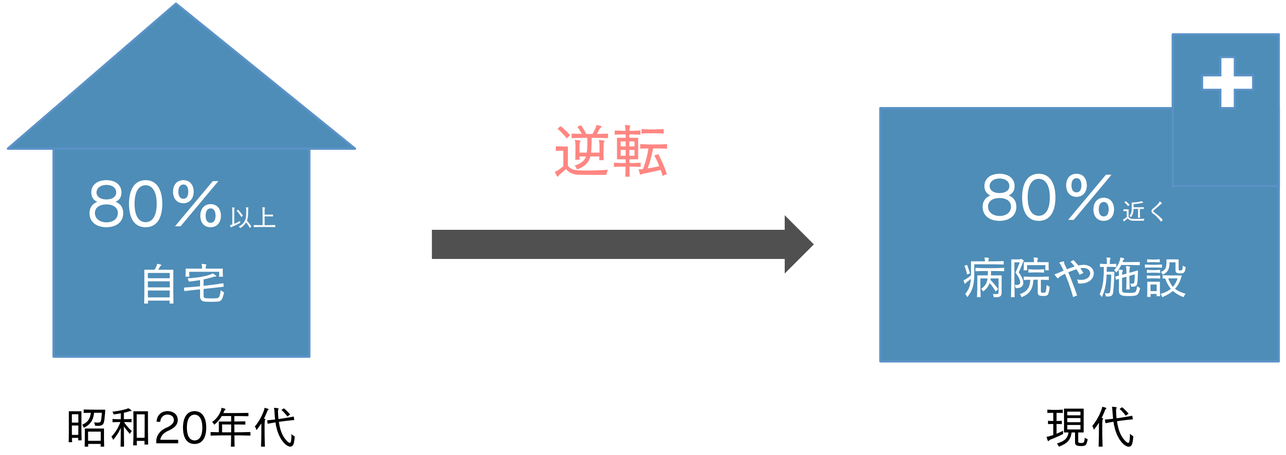
通信教育学部 美術科 写真コース 2020年卒

卒業後：

在宅医療の一端を担うなかで出逢う、
言語化できないことを表現するべく、写真作品を制作している。

# 取り組みの背景 ①

看取りの場所の変化




- 「人がどう老い、死んでいくのか」を見守った経験のない人が多い
- 「家で最後まで過ごせる」ことを情報として知らない人が多い
- かつて地域に存在した「看取りの文化」がなくなった

# 取り組みの背景 ②

在宅医療で出逢う、問いやキーワード

人間のおもしろさ

死や人生の捉え方の多様さ

老いた人のユーモア（老いの捉え方の発見！）

病気があっても
自分らしくいられる？

手が動かなくったって！
足が動かなくったって！
生きていく強さを知る

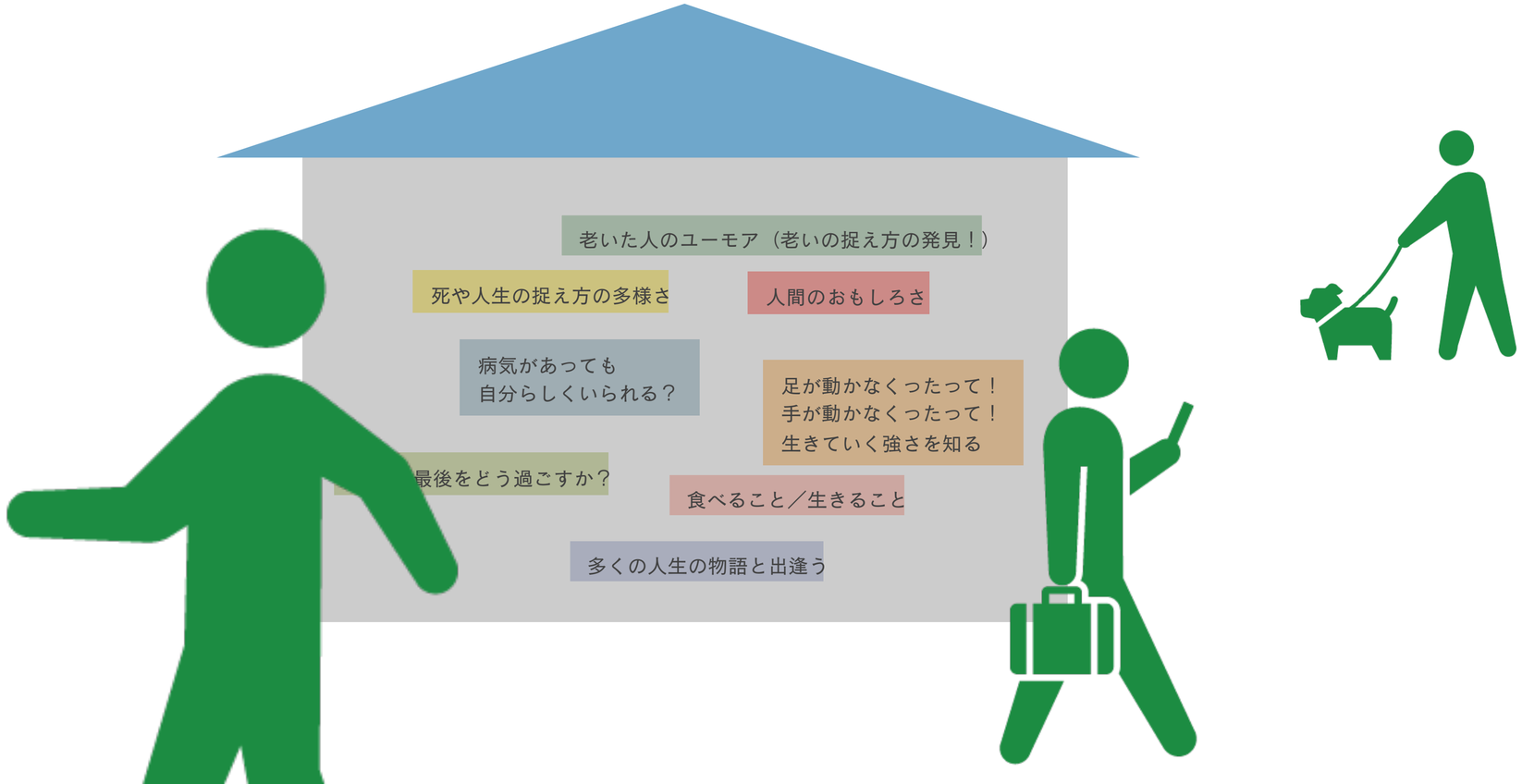
食べること／生きること

人生の最後をどう過ごすか？

多くの人生の物語と出逢う

# 取り組みの背景 ②

あらゆる人にとって、
いつか「自分ごと」となる問いだけれど、
社会のなかで出逢える機会が少ないのでは？



# 目 的

地域の人々が「老いや死」を自分ごととして捉え、
「最後まで自宅で暮らす選択肢」を知り、
思いを自由に巡らすことのできる機会・場をつくる。

↓

写真展の開催へ

# 写真作品「ぐるり。」の制作

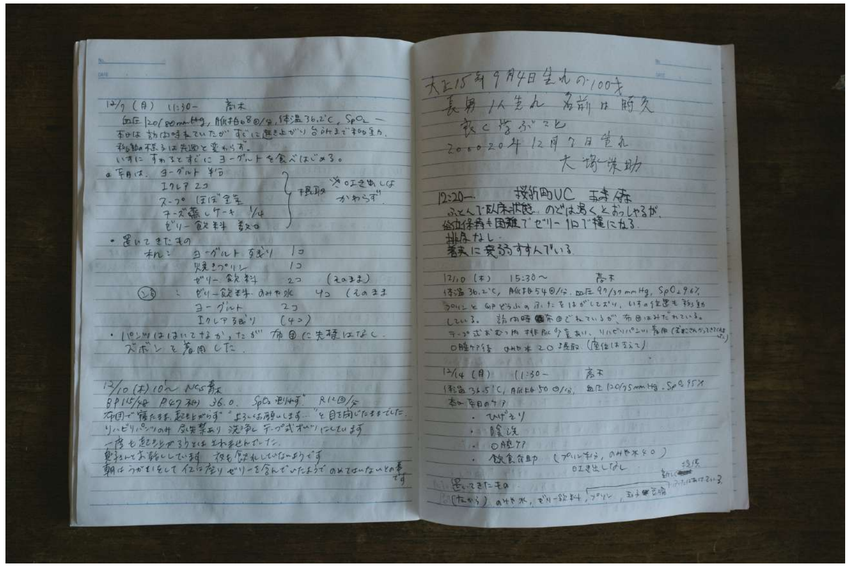
# 写真作品「ぐるり。」の制作

# 写真作品「ぐるり。」の制作

# 写真作品「ぐるり。」の制作

# 写真作品「ぐるり。」の制作

# 写真作品「ぐるり。」の制作



## えいすけさんの言葉、2年分。

連携ノートに、ケアチームが促して書いてもらっていた、とっても軽やかな日々のことば！

## 全長、8メートル。

読みやすくレイアウトし、
じゃばら折りに。

# 作品制作の思考

看取りやケアという行為を、
「人間の営み」として見つめ直し、構成する

在宅医療／介護／人生会議・・等の括りから、あえて離れる

# タイトル「ぐるり。」の意味

分野をこえる

# 地域への展開方法

# 分野をこえる、展開方法

## 1. チームを組む

**共催者・神野真実さん**（デザインリサーチャー／株式会社メディヴァ）

医療・介護分野から越境させる力／WEBでの情報発信 ／場づくりへのアイデア出し

**被写体であるえいすけさん・ご家族・担当看護師の理解**

作品やステートメントというコンセプト文を読んでもらい、理解を得る

**クリニックの協力**

開催期間の休みや訪問調整／写真展の在廊協力／あたたかく見守ってくれる環境！←重要

**アートギャラリーの人からの学び**

表現のための専門知識を持っている人たちから知識を得、生かすこと

他にも、デザイナーさんや文化施設の担当者さんや・・・たくさん！

# 分野をこえる、展開方法

## 2. 場所の選定

| | |
|---|---|
| 2021年12月 | 世田谷美術館分館 清川泰次記念ギャラリー（東京/世田谷区） |
| 2022年3月 | 世田谷ものづくり学校（東京/世田谷区） |
| 2022年5月 | 診療所と台所のあるところ ほっちのロッヂ（長野/軽井沢） |
| 今回 | 在宅医療連合学会大会（兵庫/神戸） |
| 2023年1月 | PHOTO GALLERY FLOW（愛知/名古屋） |

来年 1/8〜22
予定

多様な世代が分野を超えて訪れやすい、
地域にある文化施設を選択

# 分野をこえる、展開方法

## 3. 情報発信

WEBやSNS、DMによる

広報を実施。

- 鑑賞者が絞られないように意識した言葉を選択
- 「老いや死」がテーマとして扱われていることを明記し、距離を置きたい人がその行動を選択できるようにした

# 実際 ①　　世田谷美術館分館 清川泰次記念ギャラリー（東京/世田谷区）

# 実際 ②　　世田谷ものづくり学校（東京/世田谷区）

# 実際 ③　　診療所と台所のあるところ ほっちのロッヂ（長野/軽井沢）

# 結果 ①

開催期間：約5週間（合計）

鑑賞者数：600～800名（合計）

《鑑賞者の背景》

| | |
|---|---|
| 世代 | 小学生～80代の高齢の方まで |
| 背景 | 通りすがりの大人・子ども／施設利用者／アート関係者／医療・介護関係者／患者・利用者さん家族、など |

# 結果 ②　どんな場だったか？

地域の人にとって

- “老いや死”の多様さと出逢う場
- 自宅で最後まで過ごせることを知る場
- グリーフケアとしての場
- ACPの場
- 家族などの大切な人を想う場

医療・介護関係者にとって

- 自身のケアを客観的に振り返る場
- 病院関係者は、在宅医療を知る場

# 考察

- 「自分ごと」として捉えた人が多かったのは、作品を映し鏡として、自らを見つめる機会となったためと考える

- グリーフケアやACP、家族の健康相談の場にもなり得ていたのは、聞き手として看護師が在廊していたこと、彼女たちの立ち振る舞いが大きい

- 多様かつ自由な思考の場となったのは、写真と言葉を生かしたアート表現であったからと考える

# まとめ

死生観や人生観は、日々の生活や体験の重なりによって育っていく。
アートを通した「老いや死」への自由な思考の場は、その重なりがより厚みを増すための（小さいけれど豊かな）機会になり得る。